

Article

大学授業における感動教育の実践とモチベーション効果

Motivational Education Practices and Their Effects on *Kandoh* in University Lectures

Kawan (Ken) Soetanto

Abstract

There is a tendency for university students to be unable to find any meaning in their university life. At the same time, university professors complain about students' drop in scholastic achievement and low level of motivation. Students need to discover something that influences or changes their lives in classes, a fundamental part of university life, in order to prevent the above situations. The study focuses on *kandoh*: a state of being emotionally moved that can deeply influence people's mind, recognition, and behavior. This study discusses a way to apply the experience of *kandoh* to as storytelling in university classes. There are two surveys were administered to Waseda university students: one questionnaire and one interview. The study results show that there are experiences of *kandoh* in classes among university students; therefore, we can promote motivational education in the future. The following five items are proposed as practical teaching methods of Motivational Education Method (MEM) as a moving heart method: 1. The study contents in classes should be fresh, and provide students with new information and new experiences; 2. Professors' personal experiences and their original ideas could be shared in classes; 3. Professors need to care about their students and to communicate with them with love; 4. Professors need enthusiasm about teaching and their topic of study; and 5. Students need to set goals and work hard to achieve them in the classes.

1. まえがき

中国は日本と同様にトップ大学でも、入学してから約45%の学生が勉学や生活の意味がわからないとの報告がある、大学とは「学問を通じて学生にももの考える、知的修練、思考訓練を促す」場であり（別府、2005）、同時に社会への能動的参加、貢献のできる人間を輩出する場でもある（安西、2008）。しかしながら現在、大学で何をしたらよいかわからない、大学生活における目標がない、大学にいても将来が不安でたまらないといった学生が多く見られる。このように学生が「大学」という

実体なき箱を素通りして、社会に出て行く様を、筆者は「ユニバーシティパッシング」と名づける。この「ユニバーシティパッシング」を食い止めることはできないのか。特に、大学の最も基本的な基盤である「授業」において、学生に大きな影響や変化を見出すような「感動」を与えることはできないのか。以上が本論文の問題の所在である。

2. 先行研究

ここでは「大学授業法」および「感動」に関して先行研究を紹介する。「大学授業法」の先行研究では、学生の理解の枠組みを踏まえた授業展開（溝上、2002）、米国のベストプロフェッサーの授業（ベイン、2008）、IOC 授業法（スタント、2004～2017）について言及する。「感動」については、感動の効用、感動の教育への応用、感動の難しさの3点から先行研究を紹介する。

3. パイロットスタディ

先行研究をもとに本論文の研究目標を定めるために、パイロットスタディを行った。調査目標は以下2点である。

- 1) 大学生の「感動体験」について感動の事象や時期を探る
- 2) 授業における「感動」が実際学生に実感されているのか、実感されているとすればどのような要素が感動に起因するのかを調べる

早稲田大学国際教養学部2008年度春学期（栗田2009, スタント&栗田2010）、著者（スタント）による授業受講者25名を対象とした。スタントの授業において学生に「感動」が実感されているのか、「されているのであれば、どのような要素が感動に起因するのか」を調べた。結果、第一にこれまでの自分の人生の中で記憶によく残った感動した経験は高校、大学時代に最も多く得られていることがわかった。「スタントの授業で感動した経験はあったか」という問いに対しては有効回答者の87%（23人中20人）があったと答えた。本調査を通してスタントの授業における感動の要因は概観できたが、これらが「感動教育」の重要な要因だとまだ確認することはできない。今後より多くの調査対象者を集め、「感動した授業」の具体的内容、要因を調査する必要があるとわかった。

4. 目的

本研究では研究目標を以下に設定する。

- ① 現在の大学の授業において「感動」は生まれているのかを調査する。
- ② 「感動教育」の必要性（先行研究より）から、学生がいかなる条件をもって「感動教育」を実感できるのかを調査する。
- ③ 教師は「感動教育」をいかにしてより多くの学生に広く実践することができるのか、具体的な授業法を提案する。

5. 研究デザインと方法論

先行研究をもとに、栗田氏が実施した早大SILSとその他の各々学部の質問紙調査及び面接調査を行った（栗田2009, スタント&栗田2010）。質問紙調査は資料1に参照。

早稲田大学の3年生以上の学生102名が調査に参加した。（調査対象者の学年、学部は下図参照）

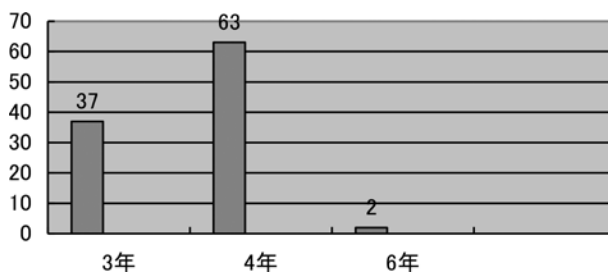


図1：調査対象者の学年

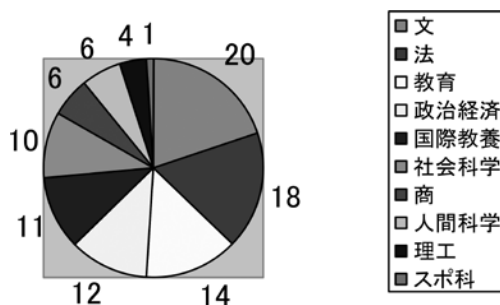


図2：調査対象者の学部

調査項目は以下の通りである。

冒頭で「感動」を「強い情動」と定義し、心動かされた経験について書くように指示したうえで、

- 1). 自身の感動体験について、これまでの人生の中でよく記憶に残る感動した経験を
 - (1) いつ（小学校入学前、小学校時代、中学校時代、高校時代、大学時代）
 - (2) 内容（記述式）
 - (3) 感動の事象（愛情・思いやり、他者の考え方、達成できたこと、一体感、新たな知識・経験を得たこと、成長、懸命さ、自然・情景に触れた、その他の計9項目からの選択式）の3つに分けて質問した。

- 2). 自身の学校内での感動体験について、
 - (1) 小学校～大学時代の授業を通しての感動の頻度（よくあった、たまにあった、ほとんどなかった、全くなかったからの選択式）、

- (2) (1)で「よくあった」「たまにあった」と答えた人に対して①いつ②内容（科目名、授業名など）③感動の事象（1と同様）
 ④感動した内容（記述式）
 ⑤感動した理由（記述式）、同様に（3）大学時代の授業を通しての感動の頻度（よくあった、たまにあった、ほとんどなかった、全くなかったからの選択式）、（4）（5）で「よくあった」「たまにあった」と答えた人に対して①いつ②内容（科目名、授業名、担当教員名、授業規模）
 ③感動の事象（1と同様）④感動した内容（記述式）⑤感動した理由（記述式）を質問した。
3. 2の(2)(4)③の感動の事象を問う項目で「教師の発言、考え方」と答えた回答者に対して、
 ①教師のどんな要素が感動を与える要因になったか（面白さ、熱意、博識さ、誠実さ、授業のわかりやすさ、その他、計7項目あてはまるもの全ての選択式）
 ②具体的にどのような教師だったか（記述式）質問した。

2) 面接調査

パイロットスタディで「感動」が広く確認されたスタントの授業及び、3.1の質問紙調査結果において「感動した授業」と2名以上に支持された授業を実際に受けている、もしくは受けたことのある、早稲田大学学部生が参加した。

その授業において、どのような点が感動を生んだか、他に受講している授業との相違点は何か。また、その授業においての感動を通して自身に変化はあったかなどを個別インタビュー形式で20分～40分程度話してもらった。

6. データの提示と分析

1). 質問紙調査のデータ提示と分析

「1. 自身の人生での一番の感動体験について」の結果を以下に示す。大学生がこれまでの人生の中で記憶によく残った感動した経験というのは、高校、大学時代に得られることがわかった。また人生において感動した事象というのは、「達成できたこと」「愛情・思いやり」の2項目が突出していた。一方で「新たな知識、経験を得た」は感動の事象としての認識が低かった。

次に「2. 自身の学校内での感動体験について」の結果を以下に示す。小学校から大学の授業を通してもっとも感動した授業を受けた時期は、高校、大学、中学、小学校の順に回答者が多かった。また、小学校から大学時代の授業における感動の事象は、人生における感動の事象の結果とは異なり、「新たな知識、経験を得た」という事象がもっとも多く、4割弱を占めていた。一方で人生における1番の感動の事象として最も多かった「達成できたこと」の項目は6%であった。この傾向は「大学時代最も感動した授業の感動の事象」問うた結果にも同様に見られ、むしろその傾向は強まった。また、いつ「もっとも感動する授業」を受けたかについては1, 2, 3年時がほぼ拮抗していて、目立った傾向は読み取れなかった。4年時に授業で感動した者が少なかったのは、調査対象の約4割が3年生であること、4年生も4年時には授業を殆どとっていないことなどの理由が考えられる。

大学時代に最も感動した授業に関して、規模は問われない、むしろ大学改革が推奨する少人数クラスよりは101人以上の大規模教室で感動が生まれることがわかった。

「感動した授業」として具体的に上がった授業の中で、2名以上の回答が得られたのは以下の授業である。

- ・オープン教育科目：トップスポーツビジネスの最前線（中村 好男／平田 竹男）
- ・オープン教育科目：映画のすべて マスターズ・オブ・シネマ（安藤 紘平／元村 直樹）
- ・法学部：水鳥ゼミ・憲法（水鳥 朝穂）
- ・留学中の授業

「3.2の(2)(4)③の感動の事象を問う項目で『教師の発言、考え方』と答えた回答者に対して」①教師のどんな要素が感動を与える要因になったか ②具体的にどのような教師だったかの回答を以下に示す。際立って突出した項目はなかったが、その中でも教師の熱意、博識さ、誠実さの3要素が学生に感動を与える要因になったと見てとれる。

2). 面接調査のデータ提示と分析

面接調査を行った9人の回答から、感動する授業の条件について以下の分析がなされた。

- ① 教師の体験談が授業に盛り込まれている
- ② 授業がしっかりと準備されている
- ③ 教師の学生に対する愛情・思いやりがある（教師の厳しさに裏付けられた愛情や、愛ある放任による達成感も含む）
- ④ 教師の熱意がある
- ⑤ 新たな知識を得られる

7. 考察

1). 大学授業で「感動」は生まれているか

先行研究、パイロットスタディから大学時代に感動体験自体は生まれやすいか否かが議論になっていたが、質問紙調査の結果と分析によると、これまでの人生の中で記憶によく残った感動した経験は高校、大学時代、つまり比較的最近に得られることがわかった。速水（1993）らは高校、大学時代（＝青年期）に感動体験がある理由を、「青年期には現在の自分に直接関連することだけに注意が向いているため」と分析する。つまり大学時代は、その後の人生に残る感動体験をするチャンスであると考えてよい。

実際に大学授業において感動は生まれているのか。質問紙調査より「もっとも感動した授業を受けた時期は高校、大学、中学、小学校の順に回答者が多かった」という結果分析が示された。高校の授業において一番感動が多いのは第一に「大学入試」に関わるからではないかと推測できる。その根拠として、これまでの人生の中で一番感動した事象で最も多かった「達成できたこと」の具体的内容で多かったのが「大学に合格したこと」であった。第二に、高校では教師と接する時間が大学と比べて多いので、教師との距離の近さが感動体験に繋がっていると推測できる。注目すべきは、

高校の授業での感動には及ばなかったが、大学授業においても感動は生まれている点だ。これは大学の授業において「感動教育」を普及するのは必ずしも困難ではない、推進できる土壌はあるということを示唆している。より多くの学生が大学授業において感動を実感し、その後の人生にその体験を活かしていけるよう、「感動教育」についての研究を更に深化させなければならない。

2). 大学授業において学生は如何なる条件をもって「感動」を実感できるのか

質問紙調査の結果と分析より、大学授業における感動の事象で1番多かった「新たな知識、経験を得ること」。次いで多かった「教師の発言、考え方に触れること」が「感動を生む授業」の条件といえる。教師のどんな要素が感動を与える条件となったかについては、熱意、博識さ、誠実さの3要素が支持されたことから、以上の要素が感動を生む授業に繋がる。さらに記述式の回答から得た、「厳しさとその裏にある学生への思いやり」、「ユーモア、面白さ」、「学生との心的距離の近さ」も感動を生む要素として考慮してよい。

面接調査（栗田 2009）からは、①教師の体験談が授業に盛り込まれていること ②授業がしっかりと準備されていること ③教師の学生に対する愛情・思いやり（教師の厳しさに裏付けられた愛情や、愛ある放任による達成感も含む）④教師の熱意があること ⑤新たな知識を得られること、といった点が感動を生む授業の要素として示唆された。面接調査は9人にのみ行った質的調査であるので、一般性を確かめるにはこれらの項目における更なる調査が必要である。

質問紙、面接両調査の結果を考慮すると、質問紙調査の結果で、大学授業での感動の要素になり得なかった「達成」「愛情・思いやり」といった項目が、面接調査では表れている。そしてこれらの2項目は、人生においてもっとも感動した事象として最も多かった2項目であった。

筆者は「新しい知識や経験を得る」「教師の発言、考え方に触れる」というのは「学問的感動」、「達成感を得る」「愛情、思いやりを感じる」というのは「心底的感動」という分類ができるのではないかと提案する。心底的感動と定義したのは、「達成感を得る」「愛情、思いやりを感じる」という感動の事象は、感動の中でもより心の奥底を動かす部類であると考えたためである。どちらの感動も重要な要素であるが、質問紙調査（量的調査）が示すように、一般に大学授業においては「学問的感動」の方が起こりやすいといえる。授業に出席し、何かを学ぶという構造の中には「新しい知識や経験を得る」ことや教え手である「教師の考え方・発言」から何かを感じ取るの方が自然に生じやすい。しかし、心底的感動の要素「達成感」「愛情、思いやり」が加わると、感動がより生まれやすくなったり、更なる感動を学生に与えられたりする授業が実現されるのではないか。そのためには教師の学生への思いや、学生のやる気が必要になってくるだろう。

授業規模に関しては、規模の大小に関わらず、上記のような「学問的感動」と「心底的感動」の要素が授業にあれば、感動は生まれると示唆できる。

3) 「感動教育実践法」の提案

以上の考察をもとに「感動教育実践法」以下5つをここに提案する。

1. 「新しい知識、経験」を学生に与えられるような新鮮な授業内容であること。

新しい知識、経験を得るという学問的感動が、大学授業における根幹部分の醍醐味といえる。

2. 教師の体験談、考え方（切り口）が語られること

教師の体験談は学生の興味関心を引き、授業に面白みを持たせる効果がある。その面白さをもって学生は感動することがある。また、教師側の人生経験を聞くことで学生は親近感を覚えたり、尊敬の眼差しを持ったり、教師の人間性を感じ取ることができる。教師との距離が近くなり、コミュニケーションを生じ、コネクションが生まれることで感動は生まれやすくなるというよい。

3. 教師が学生に対して愛情と思いやりをもつこと

週1～2回、1回90分の授業でしか顔を見ることがなくても、教師と学生が良い関係を築くことが大切である。学生への思いは「厳しい課題や約束を課すこと」、「ある程度放任すること」、「手厚く指導すること」様々な方法で伝えることができる。そして、学生はどんな形にせよ教師の思いを受け取ることで、感動を覚えることができる。

4. 教師の熱意があること

教師の学問に対する熱意、授業に対する熱意を感じ取ることで学生は感動する。その熱意は綿密に授業計画、準備がなされていること、課題が添削、評価されること、そして身振りや語り口そのものに表れてくる。教師の熱意や真剣さに学生が心を動かされることで、学生もやる気を引き起こすことができる。

5. 学生が達成感を実感できること

授業においてある程度のハードルが設けられることで、学生は困難と戦わなければならない。大勢の前でプレゼンテーションをすることかもしれないし、分厚いリサーチペーパーを書くことかもしれない。しかし、その困難を乗り越えたときの達成感、感動を通して学生は何かを学び取り、成長を実感できる。自分の中の変化に気づくことがある。まずは、教師が達成感を味わえるような土壌を用意すること、学生が諦めずにそれについていくこと、そしてめげそうな学生をしっかりと教師がフォローしていくことの三条件が重要である。

8. 討論

1) 「学問的感動」と「心底的感動」の融合については、質問紙調査及び面接調査の考察から得られた結論であり、二つの感動が融合した授業がより一層の感動を生むのか、一般性を立証するところまで今回の研究は及ばなかった。「学問的感動」と「心底的感動」の両方の要素が確認された授業、どちらか一方の授業、どちらの要素もない授業における感動体験について、今後量的調査をすれば、筆者の提案が確認されるであろう。

2) 面接調査で「スタント先生の授業における感動」を話した3人の学生に共通して見られたのが感

引用文献

- 安西祐一郎 (2008) 日本をひらく グローバル世紀への提言 慶應義塾大学出版会
- 石井 生滋 内藤 勇次 (1991) 青年期における感動体験に関する研究 日本教育心理学会 総会
発表論文集 vol33, 423-424
- 小倉 丈佳 橋本 巖 (2001) 感動経験による自己理解の変化と自己成長 日本教育心理学会
- 金子 元久 (2008) 若者の変化と大学教育 IDE:現代の高等教育 No.498, 4-10
- 荻谷 剛彦 (1998) 変わるニッポンの大学～改革か迷走か～
- カール ヤスパース 福井一光訳 (1999) 大学の理念 理想社
- 栗田真由子 (2009) 大学授業における感動教育の効果と実践。早稲田大学国際教養学部卒業論文
- 黒田 泰正 (1997) 児童が感動する算数指導の工夫 日本数学教育学会誌 vol.78, 25
- 郷 通子 (2008) 答申案の目指すもの IDE:現代の高等教育 No.505, 4-9
- 古宮 昇 (2004) 大学の授業を変える 晃洋書房
- 小森 栄治 (2006) 理科は感動だ! : 蓮田南中の取り組み 日本科学教育学会研究会研究報告20(5),
47-50
- 佐々木和哉 (2006) サッカー:特性を楽しみゴールの感動を味わう (体育5年A組) 和歌山大学教
育学部附属小学校紀要 vol.30, 125-128
- 産経新聞社会部 (1992) 大学を問う 一荒廃する現場からの報告 新潮社
- 新村 洋史 (2006) 大学生が変わる 新日本出版社
- 鈴木典比古 (2008) 「学士力」対「教育力」—大学は時代の要請に応えられるか IDE:現代の高等
教育 No.505 31-35
- スタント カワン (1994) チャレンジとすれば道は開ける「変革時代の提言」93-102. IN 通信社
----- (1996) 私の挑戦—どんな学生も夢中にさせて見せます—「嫌われる理工系の楽
しさ」 鶴川 昇監修 プレジデント社
----- (2003) ユニバーサル化時代における大学教育に関する研究 早稲田大学博士(教
育)論文
----- (2004) 「フリーター対策」では遅い 感動なき高等教育の責任 オピニオン, 領
空侵犯 日本経済新聞朝刊2004.9.16
----- (2006) 今こそ感動教育を—NEET・フリーター問題からの考察 Opinion Waseda.
Com on Asahi.com 2006.5.15-23
----- (2007) 教師が変われば学生が変わる。特集教育再構築への道。公明党機関紙。
P.2-5, 2007.1
----- (2007) 次代の開拓者へ27. 財界九州4月号 2007.4
----- &周楊華 (2007), 日中フリーター現象と高等教育政策の関係およびその戦略的な解
決法の研究。日中学術国際学会(中日研究)2007.12
----- (2010) 「感動教育」Touching Education. 講談社 2010.8 ISBN978-4-06-216334-7
----- (2010) Soetanto Effect: Ubah Orang Buangan Jadi Rebutan. Bentang. 2010.8 (Indonesian)
----- (2008) 全球化時代の大学教育研究 ~ IOC 教学法 (互动控制教学法) ~ Chung
Chung Journal, p.1-10, 2008.9.5
- 日経BP (2008, 2009), 本気が作る「やる気」人間. 真剣にぶつかってこそホンネ NikkeiBp Business
Online from 2008.8.9 to 2009.7.26 (Total 16 articles publication) [http://business.nikkeibp.co.jp/article/
pba/20080801/166981/](http://business.nikkeibp.co.jp/article/pba/20080801/166981/)
-----& Sakumi Shimizu, (2009), “Motivating students to speak out,” IEEE-ICCSIT, p.50-54,

- 2009 2nd IEEE International Conference on Computer Science and Information Technology, 2009.9
- (2010) 「感動教育」 Touching Education. 講談社 2010.8 ISBN978-4-06-216334-7
- (2010) Soetanto Effect: Ubah Orang Buangan Jadi Rebutan. Bentang, 2010.8 (Indonesian)
- & 栗田真由子 (2010) 大学授業における感動教育の実践研究. P.461-462, 第26回
日本教育工学会, 2010.9
- (2011) Touching Education: Reaching Out People to the Change in Self- development from
Setback to Growth. ACP 2011 Osaka. 2011.3.21
- (2011) Touching Education: Reaching Out People to the Change in Self- development from
Setback to Growth. ACP 2011 Osaka. 2011.3.21
- 読売新聞「学生の学習意欲に腐心」大学の再生. 2012.05.12
- (2012) TEDxWasedaU. Motivational Education. Inspire and Save the Next.2012.6.13
- & Mai Higuchi (2012) Inducing Student's Intrinsic Motivational Through Conceptual
Learning in a Digital Circuit Class. IEEE Proceedings Journal, p.86-91, 2012.12
- (2013) 感動教育による概念的思考と論理的思考の併用がもたらす学習一意欲の向
上及び意識変化の実践報告. 基調講演. プロジェクト研究, 第8号, p.138-145, 2013.3
- 日経ビジネス (2013) 厳しくも暖かい早稲田大学の熱血教授, カウンスタント。「教育機関」として
の大学を考える. 白壁 達久, 経ビジネス, 2013.10.25
- (2013) グローバル社会における大学教育および人材育成の研究: リーダーを育
てる対話法および学習・研究コミュニティの構築. Transcommunication. Vol.1.2013. p.85-104.
2014.3
- (2013) 「寛厚と大爱——点石成金の陈文权教育法」清华大学出版社. 2013.5 清
華大学出版社. 2013.5 (in Chinese)
- (2014) グローバル社会におけるモチベーション教育論. IOCによるインスピレー
ション及び感動のある教育 Waseda Global Forum. No.10 (2014). p.275-298.1014.3
- 中国新闻网 (2014) “教学神人” 陈文权: 感动与爱心是教育的最高境界, 2014.10.14
- (2017) 感动教育出奇迹, 朽木也能成栋梁. 2015年ノーベル物理学賞梶田隆明章教授と
共に基調講演をした。2017年日中科技交流东京论坛. 2017.11.05
- (2018) 感動教育, 震撼心霊, 中国出版社, (Book in press)
- 竹内 清 (2008) 学生の視点からの学士過程教育 IDE: 現代の高等教育 No.498, 4-11
- 田中 每実 (2002) 大学授業研究から大学教育学へ in 大学授業の構想過去から未来へ 東信堂
- 戸梶亜紀彦 (2004) 『感動』体験の効果について一人が変化するメカニズム— 広島大学マネジメン
ト研究 Vol.4 27-37
- 日本経済新聞 (2008.7.21) 中教審「大学学士改革」答申へ——学部教育に強い危機感、淘汰も不可
避 (教育)
- 速水 敏彦 陳 恵貞 (1993) 動機づけ機能としての自伝的記憶 名古屋大学教育学部紀要
- 速水 敏彦 陳 恵貞 高村 和代 浦上 昌則 (1996) 教師から受けた感動体験 名古屋大学教
育学部紀要 vol43, 51-63
- ベイン ケン 高橋 靖直 訳 (2008) ベストプロフェッサー (高等教育シリーズ145) 玉川大学出版部
- 別府 昭郎 (2005) 大学教授の職業倫理 東信堂
- マーチン トロウ 天野 郁夫 喜多村和之訳 (1979) 高学歴社会の大学 エリートからマスへ
東京大学出版会
- 溝上 慎一 (2002) 学生の理解の枠組みを踏まえた授業展開 —教授法技術を乗り越えるための視

点—in 大学授業の構想過去から未来へ 東信堂

茂木健一郎 (2007) 感動する脳 PHP 研究所

文部科学省中央教育審議会大学分科会 (2008) 学士課程教育の再構築に向けて

山内 乾史 (2002) 大学の授業とは何か in 大学授業の構想過去から未来へ 東信堂

----- (2004) 現代大学教育論 東信堂

読売新聞 (2007.3.21) 東大解剖 第3部 (7) 心の問題「できる子」こそ

----- (2008.8.29) 教師力08 (3) 部活動で感動体験を早稲田大学学生部 (2007) 第26回学生生活調査報告書

